

クロスアンジュ 儂き竜
達への鎮魂歌

見知らぬ誰か

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

『マナ』と呼ばれる画期的な情報伝達・物質生成技術によって人々は争いを止め、世界には安寧と平穏が訪れた。

——だが、そんな世界には例外が存在する——

マナを使えない人間、それがこの世界における例外だ。

マナの恩恵を得られない人間は『ノーマ』という反社会的な人物として虐げられ『ノーマ管理法』と呼ばれる法律に基づき社会から隔離される。本来（何も持たぬ人間の見地）ならばその対応を非人道的と感じるが、この世界の人間（マナを使える人間）は何の疑

問も抱かない。

ここで疑問に思う者も居るだろう、ノーマが社会から隔離されるとはどういうことなのかということに……

この物語で語られるは、そのノーマの暮らす辺境の軍事基地『アルゼナル』で静かに(？)暮らすレナという少女の物語である。

目次

第01話	サヨナラ	1
第02話	入隊	10
第03話	初陣	22
第04話	改造	34
第05話	レナ機改、 出撃	44

第01話 サヨナラ

私がマナを使えないノーマだと自分自身で理解したのは8歳の頃だった。

私の家族が住んでいたのは集落どころか山の中……周りに家はなく、私と父さん、母さんの3人だけの生活だった。

父さんも母さんも私の前でマナを使おうとはしなかった……どうやら二人共私を守るために私が生まれて早々に自分の両親や社会と縁を切り山奥の家に引っ越してきたようだ。

ある日の夜、私は両親の話を聞いてしまった……それが8歳。

まだまだ幼い私だったが両親が私のために無理をしていたことが分かった私は両親から習った字で手紙を書いて家出した。手紙の内容は以下のとおり

『愛する父さんと母さんへ』

私のために無理をしてくれてありがとう。そして無理をさせてごめんなさい。

私は父さんと母さんのために出て行きます。どうか私のことは忘れて幸せに暮らしてください。

こんな馬鹿な子供でごめんなさい。生まれてきてごめんなさい、迷惑かけてごめんな

さい。

だから、どうか幸せに

2人の娘、レナータⅡレインクヴィスト』

家出した後は家からも見えた村に行きお堅い服を着た人に声を掛けた。私も傷つきたくは無かったから。

「あの……」

「どうしたんだい？」

その人は優しそうな顔で私にそう聞いた。

「周りに聞かれたくないこと……だから……」

「……？ ああ、分かったよ。おいで」

私はその人に手を引かれ、着いたのはいかにもお役所的な場所。その中にある個室だった。

「それで、聞かれたくないことって？」

「ノーマ」

「ノーマについて聞きたいの？」

私はそう聞かれて一度考えなおし言った。

「マナってどうやって使うの？」

「ああ、たまに居るからね……マナの使い方を教えない親が。よく見てるんだよ?」

そう言つてその人は「マナの光よ」と言つて右手に緑色に輝く玉を作り出した。

「こうするんだよ」

私はその玉を見て……そして右手を伸ばし、触れた。

パリン

そんな音を立てて輝く緑色の玉は割れた。

「私はノーマ、どうすればいい?」

「え……お、親は?」

「お父さんとお母さんは私を守るために山奥に住んだ。私はノーマつてりかいした時に家を出た。だから、居ないよ?」

その人はとても驚いていた。何に驚いていたのかは分からない……けど、その人はすぐに聞いてきた。

「名前は?」

「レナータⅡレーンクヴィスト、8歳」

「……ノーマ管理法第一条第三項に基づき君を第1194—34ノーマとして認定する

……辛かつたらう?」

「お父さんとお母さんに比べれば……まだマシ……」

「強いんだね、君は」

私は、その人に「最期の人の世界を見てからこの世界からサヨナラしよう」と言われてその日、夜まで最期の世界を見た……人の赤ちゃんがノーマとして認定される瞬間も。

「醜い」

私はノーマを見る人の姿を見てそう小さく口にした。

なんと醜いことか……大して人と変わらないノーマを侮蔑の目で見る人の姿はまだ純粹だった私の目にはそう映った。

そして、その日の内にノーマ収監施設アルゼナルへと送られて、ノーマとしての生活が始まった。

・……………

「この子が親に黙って出てきたノーマかい」

「そのようです」

「名前は？」

「レナータⅡレインクヴィストだそうです」

私はややくすんだ金髪を持つ女性と紺色の髪の女性の前に立っていた。服は着てる、

まあ……母さんの手作りだけど捨てられるのがオチかな。

「守ってくれた親を裏切つてまで此処に来るとはねえ……」

「親のことを考えてノーマとして出頭したらしいです。元いた世界に未練は無いようです」

「未練が無いんじゃないかと……親のために来ただけ……」

二人共関心したような顔をして笑った。

「とてもいい親だったみたいだね」

「マナが使えない故に初等教育は受けなかったようですが親から生活する上で必要なことは教わっているようです」

「……しつかりした親だ」

「私みたいなのを産んで、不幸になるなんて可哀想」

再び2人はフツツと笑った。何が可笑しいんだろう？

「ノーマでここまで親思いなのも珍しいもんだねえ……」

「そうですね。では、もろもろのことをしますか」

「身体的にはデータ上は？」

「特に問題なし、とても健康ですよ」

「服はどうする」

「一度こちらで回収後、返還という形に——」

「――返さなくて良い」

今度は驚いたような顔の2人。

何か微笑ましいものを見る顔はなんだか両親に近いものを思い出させた。

「辛いんだろう？　好きだった親と離れて」

「8歳の子が判断することじゃ無いですからね」

気付けば目から涙を流していた……ああ、悲しかったんだ……私。

「分かった、服は回収した後処分する。監察官殿、制服を」

「はい」

監査官と呼ばれた女性は袋に入った服を渡してきた。

「これがここでの服です」

「ん……………」

私はそれを受け取り、袋から出すと来ていた服を脱いでその制服に着替えた。

脱ぎ捨てた服を見て……私は言った。

「マッチとタライ貸してください」

「何するんだい？」

「私の手で処分します」

再び驚いたような顔……くすんだ金髪の女性がマッチとタライを持ってくる。

私は監察官を見て聞いた。

「検査はしないの?」

「毒物なんて無いでしょう?」

私はコクリと頷いて服を手に取ると片手でマッチに火を付け服に近付けた。

涙で視界が歪んで見難かったがそれでもマッチの火を服に近付け燃やした。徐々に赤く黒くなつていく服をタライに落とし、その様子を静かに見守る。

「あ……………」

全て燃えて灰になった時、私の心からナニカがフツと消えたような感覚がした。何か重いものを背負っていてそれが消えるような感覚……

「時間を取らせてごめんなさい……」

私は制服の入っていた袋に燃えた灰を入れてタライとマッチを返した。

「その灰、どうするつもりだい?」

「どこか適当な場所に埋めます。私の心だったもの」

「レナーターレーンクヴィスト」

金髪の人にそう呼ばれてその人のほうを向く。

「お前は今からレナだ。いいね?」

「まるで愛称」

「そんなものだ。ここでの名前なんて」

「はい」

私がそう返事をするのと金髪の人が言った。

「私はジャスミン、ここアルゼナルの司令をやっている。近いうちに変わるだろうがね」
 「監査官のローザ・ランプレヒトよ。ローザ監察官殿と呼ぶように」

「分かりました、司令、ローザ監察官殿」

ローザ監察官殿はよろしいと頷くと言った。

「あなたにはまずここでの教育課程を踏んで貰います」

「4年で実戦……案外酷な話だ」

「教育課程……ですか」

「ここでの教育という話です。一般教養などではないのですぐに終わるでしょう」

何を勉強するのだろうか……まあ、そのうち分かるかな……

・――・――・――・――・――・――・――・――・

次の日、早速初等部の子達と教育課程を行っていた。

「Dimensional Rift Attuned Gargantuan Organic Neotypes (次元を越えて侵攻してくる巨大攻性生物)」という通称『ドラゴン』を迎撃・殲滅し人類の版図を守るのがこのアルゼナルとノーマの任務

です」

私は液晶モニタを見ながら説明されることを聞きながらその内容を理解していった。「ノーマはドラゴンを殺す兵器としてのみこの世で生きることが許されているのです。そのことを忘れず、しっかりと戦いに励みましょう」

『イエス・マム』

「これから私達は——」

そこからは比較的どうでもいい話だったので聞き流した。多分一番最初のを理解してれば十分だろうし……

第02話 入隊

アルゼナルへと送られてから早4年、私は12歳になっていた。

12歳になると一部のノーマはパラメイルを駆るメイルライダーとなりドラゴンを狩る任務に就くことになるらしい。

「メイルライダー志望か」

2年前に変わった司令官のジルに志願書を提出して言われたのがそれだった。

「別に深い意味は無いが何故だ？」

「深い意味が無いなら何となくと答えます」

司令官はフム……と言って志願書から頭を上げた。

「メイルライダーはアルゼナルの中でも損耗率の激しいところだが……覚悟はあるのか？」

「パラメイルに乗ってドラゴンを狩る……楽しそうだから、楽しみに危険は付き物です大丈夫です」

司令官は私の返事を聞くと大きな声で笑い出した。

「クハハハハハ！ こりや傑作だ」

何やら面白いものを見るような目で私に言う。

「良いだろう、レナ。お前の志望通りメルライダーとして任務について貰う。詳しいことは明日説明する、下がっていいぞ」

「了解しました」

私は右手を人差し指と中指だけを伸ばして頭に掲げる形の敬礼をすると司令室から退室した。

司令室を出るとそこには此処に来てから何かと縁のあるジャスマミンが立っていた。

「志望書を出してきたのかい？」

私はコクリと頷いた。

ジャスマミンは少し目を閉じて何かを考えるように少し唸ると目を開いて言った。

「メルライダーに志望したんだらう？」

「なんで分かったの？」

「ここに来た時からアンタのことはよく見てる。その経験からさ」

流星は元司令官で今はアルゼナルの商店とも言えるジャスマミンモールを一人で仕切っている人だ……観察眼だけは鋭い。

「パラメイルを改造するときには私に良いな。結構な額は取るがパーツを売ってやるよ」

「レナジャスレートは有効？」

「勿論有効だ。私が勝った時はツケにしといてやるよ」

レナじゃスレートは私がジャスミンモールで何かを大金はたいて買うときに使うジャスミンとの値段交渉勝負でポーカー1回勝負のことだ。私が勝てば値段を半額に、ジャスミンが勝てば倍額にするハイリスクハイリターンの勝負だ。過去にやったのは2回……どつちも負けたが……あれ以来イカサマの技を磨いてきた……今度は負けなはずだ。

「ありがと」

私はそう言つて自分の部屋の方へと戻つた。

・――・――・――・――・――・――・

次の日、朝早くに私への細かい連絡がされた。

通達内容は次の通り

・私をメイルライダーとして第1中隊に配属する

・今回の新人メイルライダーは私一人のみ

他にもあつたが、これぐらいだな。

そして私は今、司令官とともにシミュレーター室で入隊式を行つていた。

「司令官に敬礼！」

隊長と思しき人の掛け声で第1中隊の全員が司令官に敬礼をする。

ここに居る司令官と自分以外の全員はライダースーツ（長時間の行動と排泄の利便を考へて胴体部前面と臀部が露出しているもの）で頭にバイザーをしている……これがメイルライダーのパラメイルを扱うときの服装らしい。

「あとは任せたまよ、ゾーラ」

「イエス・マム！」

多分隊長（と思われる人）がそう答えると司令官はここから居なくなつた。

え、連れて来るためだけに司令官動いてたの……？ 他の下つ端にそういうの任せても良くない？

シミュレータ室のドアが閉まる音がすると全員が敬礼で挙げていた腕を下げた。

「死の第一中隊へようこそ。隊長のゾーラだ」

そう言つて近づいてきた隊長の私の尻に向かつた左手を私はクルリと回り握手するように左手で握つた。

「よろしくお願いします。ゾーラ隊長」

他の中隊メンバーが「おお」と声を上げる。私は何かしたんだらうか？

「状況判断能力、反射神経はいいようだねえ……副長、紹介しな」

そう言つて見ていたのは黒髪ツインテールの人……副長さんらしい。カラーリングは水色？

「イエス・マム。第1中隊、副長のサリアよ」

「よろしくお願ひします」

副隊長さんはサリア……さん。心が読めるのかね、この人。

「こちらから突撃兵のヴィヴィアン」

「やつほ！」

「ヒルダ」

「テキトウによろしく」

ヴィヴィアンって方がピンク色のちんまいの、ヒルダが赤……ヴィヴィアンは髪がオレンジっぽくてヒルダは真っ赤……この人って髪が特殊な人多い。

「軽歩兵のロザリー、重歩兵のクリスとエルシャ」

「よろしくな」

「よろしく……」

「よろしくね」

ロザリーが黄色髪はオレンジ、クリスが銀髪緑、エルシャがオレンジのピンク髪……胸でかい。

……って、なんで既存メンバーが先なんだ？

「たいちよ、たいちよ」

「何だ、新米」

「普通新米先じゃないですか?」

「状況適応能力も高い、普通以上の一般常識もある……マナを使えない不良品と呼ばれるノーマの中では優良品だな」

「もつとも差別意識が高いのはその差別を受けている側……というのは本当ですね」

隊長は大きな声で笑い始めた。他の隊員は苦笑いだったが……

「面白いなあ、お前。一般常識があるんじゃないやなくて知識量豊富なんだな」

「ルームメイトからは本が多すぎて頭が痛いと言われてます」

大概は哲学書とか文学小説だけど……歴史本もあるか。

あれよあれよと言う内に増えに増え続けて今では百冊超えた……ジャスミンに処分を頼もうにもキヤツシユが掛かる……現状本棚では足らずに積んで積んでという状況。メールライダーに志望したのは実入りが良いという話だからだ。

「こうやって雑談するのもいいがやることもあるからな。自己紹介しな」

「レナと言います。趣味は読書、よろしくお願いします」

礼をして顔を上げるとさつきまで顔の左側に掛かっていた髪がズレて左目にヤツたものが全員に見られる。

ペンタクル（五芒星形）のタトウー

何となく入れてみたものだったが案外気に入ったのでそのままにしているものだ。

「品行方正な中身のくせに左目のそれとは……チグハグ感がまたイイなア」

また尻を揉もうとする隊長の手を引っ張り、脚を掛ける。

「おっと」

存外運動神経は良いようで転びそうな姿勢からしつかりリカバリしていた。

「すいません、余り好きじゃないので」

「此処にや男は居ないからねえ……人によってはそういう方向に目覚めちゃうのさ」

「悪いとは言いませんが程々にお願ひします」

結構この隊長さんいい人だ。上官に対してやってはいけないことをやっているのに特に何も言わない……スキンシップ程度の考えなんだろうけどそれは親密になろうとしていることだし……

「ま、レクリエーションもここらへんにして……サリア、コイツを預ける色々教えてやれ」

「イエス・マム」

「まあ、流して教えるだけでも問題とは思わがな」

「隊長さん、そんな過剰評価しないでください」

まるで私の言ったことなど聞いていないような調子で続ける。

「皆、期待の新人と仲良くな」

頼むよ、話を聞いてくれ……

「サリアは新人教育、他は訓練だいいね」

「」「」「了解」「」

「では、掛かれ」

『イエス・ママ』

私の教育係になったサリアを除いて各個にシミュレータに入る。

「こつちよ、レナ」

「はい」

私の返事を聞いて少し苦い顔をするサリア……なんだろうか……

「それ、素じゃないわよね」

「仮にも上官ですし」

「……ここでは自分のままの方が良いわよ。猫を被る必要なんて無いわ」

「はーい」

サリアは1つ息を吐くと「こつちよ」と言ってシミュレータ室から出た。

「何をするのです？」

「更衣室に行つてライダースーツに着替えて貰うわ」

着いたドアを開けると複数のロッカーがあり、サリアはその中からいくつかのロッカーを開けて確認し一つ引つ張ってきた。

「これで良いかな」

出してきたのは灰色のライダースーツ……内側には『L I Z A』のワッペン、そして

……

「赤いの付いてない？」

「ああ、前の持ち主の……死んだわ。確か一昨日」

わあ……なんつー恐ろしい場所だろうか……持ち主亡くなったのもつい最近で

……

「嫌なら新品買って」

「別に良い」

私はワッペンを剥がしそれを着た。

・――・――・――・――・――・――・――

場所変わってシミュレータの中。私はバイザー付けてパラメイルの説明を受けていた。

「これが機体を操作するスロットル、火器関係を操作するスイッチにトリガ。こつちが機体の状態や電装系のチェックが行えるインジケータ」

「パラメイルそのまま何ですか？これ」

「一部は違うけどだいたいそうね」

サリアが居なくなつてバイザーからの通信に切り替わる。

『最初から出来る訳はないからまずは飛ぶ感覚を叩き込んで』

「あい、了解」

——各部チェック、問題なし

——プリナムチャンバーのチャージ確認

——アレステイニングギアリリース

——リクエスト、コンフォームド

『ミツシヨン07、スタート』

始まった瞬間、シミュレーターに表示された風景が後ろに流れ始め、顔に風が掛かる。

「うわ……凄……」

上昇、旋回……それらを凄速度で行うパラメイルのスペックの高さが伺える。

『案外、怖がつてないのね』

「アルゼナルに来る前は山の中で暮らしていたもので……川では似たような感覚が

……」

『子供のするような遊びじゃないわね』

風が気持ち良いね……偽物だからちよつと嫌だけど……

『急降下訓練を開始するわ』

唐突に下がる機首……速度がどんどん上がり地面が近づいてくる。

私はスロットルを引いて機首を上げて地面に激突するのを回避する。急降下は結構怖い……けど、なんか面白い。子供の頃の川での遊びの比じゃない！

「面白いね！ これ!!」

自動操縦が無くなると私は自由にスロットルやレバーを操作し、パラメイルを操る。

急上昇、急旋回、宙返り、後ろ流しながら旋回……自由に空を飛ぶような感覚……自分の動かしたいように機体が動く……!!

・……………

パラメイルの訓練が終わった後、中隊員全員でシャワー室で汗を流していた。

「なかなかやるじゃないか、新米」

「レナですよー隊長殿ー」

冷たいシャワーを頭から被り体を冷やす。

5秒程度だが……やり過ぎるとショックで気を失ったり最悪死ぬためそれが限度。温かいシャワーに切り替えて浴びる。

ふとシャワー室の向こうが気になってサリアに聞く。

「あっちの空が見えてる方にドアあるけど何？」

「お風呂ね。湯が張ってあるのよ」

「あつたんだ」

私はシャワーを止めてお風呂の方へ向かう。

「おや、新米はフロの方が好きかい？」

「こっちのほうがゆっくり出来るので」

私はドアを開けて湯を一度被ると風呂に浸かった。空が見えるようになっており、結構な絶景だった。

第03話 初陣

第1中隊に入ってから早1週間。その間に体力作り、銃器の扱い、格闘術、戦術論、パラメイルの操縦などについて叩きこまれた。この歳（12歳）にしてはかなりいい数値らしい……

「レナ」

「ジャスミン」

そんなある日の夜、少しジャスミンの経営するアルゼナルの商店であるジャスミンモールをぶらついているとジャスミンに話し掛けられた。

「どうした？ ジャスミン」

「お前さんのグレイヴが納入されたって話だ」

グレイヴというのはこのアルゼナルで運用されているパラメイルの新米に渡される初期機体でメイルライダーはそれを自費で改造するらしい。改造パーツはジャスミンが仕入れるパーツ……まあ、新米には関係ないな。

「1000万キャツシユまではツケてやるから改造しないかい？」

「私にそんなに肩入れして良いのかい？」

「お前の親代わりだからね。情が移っちゃったよ」

そんなんで大丈夫か……？

「いや、シミュレータでいたい分かってるから大丈夫だ。今はあれで良い」

「そうかい？ ま、改造したいときは言いに来な」

「あいよ〜」

そう言つて私はジャスミンモールから出て司令室へと向かった。

司令室に入る。

「司令官」

「レナか……なんの用だ？」

「自分のパラメイルは何処でしょう？」

「早速改造か？ パラメイルはノーマの棺桶だからな……整備デツキにあるはずだ。や

るならそのメイつてやつに言いな」

私は敬礼して下がる。

・――・――・――・――・――・――・――

整備デツキ……そこには20機近いパラメイルが置いてあった。

「新人のレナだよな？ 何か用？」

近づいてきた小さいのに聞く。

「メイ……つてやつは何処か知らない？」

「ああ、それは私だよ。パラメイル関係で何か用？」

「こんな小さいのがここで仕切ってるのか……凄いな……」

「自分のパラメイルはどれ？」

「えーと……ついさつき納入されたやつだから……あれだね」

メイが指さした先には白と水色のパラメイルがあつた。

「それで、新人が早速改造？」

「えーと……各関節の反応性を上げたいんだよね」

「レスポンス……？ 分かった。でも慣熟の時間あるかな」

「兎に角お願いしたいんだけど……」

メイは少し唸ると頷いた。

「分かった。初回だしそこまで難しいことじゃないからお金は要らないよ」

「ありがとう」

「多分、明日には終わつてると思う。ここから先は私達整備クルーの仕事だから」

「え……自分の調整とかは？」

「あー……じゃあ、現状の状態からどれ位早くして欲しい？」

私は少し考え、そして言った。

「反応を約1.5倍にしてくれるか？」

「分かった1.5倍だね！」

メイはそう言つて整備に向かった。私もこれ以上やることはないため自室に戻ることにした。

・·····

「おかえりー」

部屋に戻るとルームメイトのハナがそう言つて迎えてくれた。

「ただいま」

「少し油臭いね、整備デツキにでも行つた？」

「いつも通り、鼻がいいね」

ベッドに座りながら言つた返事にハナは笑つた。

「それくらいしか無いからね。整備デツキ行つて自分のパラメイルでも見てきたの？」

「いや、改造を頼んできた」

「手が速いね·····でも、ちよつと危ないかも」

ハナが出した1枚のカード·····ハナがよくやっているタロットカードだ。

描かれているのはボロボロのローブを被つた大きな鎌を持つ骸骨·····XIII（13）番『死神（Death）』出された方向は正位置·····その意味は·····

「終末、破滅、離散、終局、清算、決着、死の予兆、終焉、消滅、全滅、満身創痍、不吉……か」

「ワンカードスプレッドだからこそストレートな意味だね」

もしかすると危ないか……占いだしな。

そう思つてカードをハナに返そうとした瞬間、サイレンが鳴り響く。

「……ほんとに、ヤバイかもね」

ドラゴン警報のサイレン。

「じゃ、行ってくる」

私はベッドから立つて部屋を出た。

・――・――・――・――・――・――・――・――・

速攻でライダースーツに着替え、整備デッキに私は向かった。

「メイ！」

「何?！」

声のした方に向かう。

「私のグレイブの方は?」

「結構ヤバイかも」

「どういうこと?」

メイは少し言い渋るが、言った。

「微妙な調整が終わってない。後はインジケータ側から弄るだけなんだけど……」

「微調整……大体は終わってるんだよな？」

「うん！」

「その微調整のやり方教えて。移動中にやる」

「それは駄目！」

厳しい口調でいきなりそう言われ私は一歩下がる。

「行動中の調整はダメ。訓練中ならまだしも実戦ではダメ」

「……分かった。基本運用は問題ないよね？」

「少し不安は残るけど大丈夫だと思う」

「分かった」

恐らく戻す時間はないのだろう。ならば仕方が無い……

『——第1中隊はデフェンスコンディションをクリリナリーへ』

『——エナージエンシー』

『——第1種遭遇警報発令』

騒がしいがこれもいつか当たり前になるだろう。

発進デッキへ向かうともう既にそこには中隊員全員が揃っていた。

「機体の調整頼んだ直後でこれだろ？　どうなんだ？」

隊長がそう聞いてくる。

「大半は終わって後は微調整だったって話です」

「そうか、後方に待機だ、いいね？」

「はい」

発進デッキにパラメイルが揃うと全員騎乗する。

『——新米は調整不良のため最後方で援護。サリア、直援に付け』

『「イエス・ママ」』

各機発進し前方が開く。

訓練通り、後方にアレステイングギアが展開されるのを確認するとランディングギアを起こし発進する。

高度1200……やはりシミュレータとは感覚が違う。風が気持ち良い……つてうわ!!

『——振り落とされるんじゃないよ！』

「りよう……かい……！」

レスポンスが良いせいでシミュレータの感覚で動かすと挙動が全く違う……

《——シンギュラーまで距離残り10000》

『——よオーし！ フォーメーションを組め!!』

『イエス・ママ!』

隊長を中心とした円陣形、私はその一番後ろに付く。

《——シンギュラー開きます!》

空間に紫電が走り、円を描きそこから翼を持つソレが出てくる。

「あれが……ドラゴン」

《内訳はガレオン級1、スクーナー級17》

『——案外多いが……全員、聞け！ スクーナー級を5残し他は残らず狩りつくせ。新
人教育はその後だ』

『イエス・ママ!』

「イエス・ママ」

『——特に命令はない、各個に撃破しろ』

全員が突撃兵が突っ込み、他がアサルトモードで砲撃を開始する。

パラメイルには航行するためのフライトモードと戦闘するための人型の駆逐形態があるのだ。

『——レナ、アンタは後方で待機。分かってるわね』

「了解」

駆逐形態に変形しそこに留まる。

……つて、待っただけじゃダメなんじゃないか……撃ち漏らしがこっちに来るし……
「はあく……ふうく……」

照準を合わせて、トリガーを引く。

右手の対ドラゴン用アサルトライフルから弾が撃ち出されその何発かがドラゴンに命中し落ちる。

「怖い……」

『——落としました?』

「これでいいの? サリア」

『——あ……えつと……』

突然インジケータ横のモニターに隊長が映る。

『——サリア、まだ数は多いが始めても構わん。腕は言いようだからねえ!』

『——イエス・マム。そういうことだから始めるわ』

「よろしく……」

結構怖いよ、これ……

『——戦闘についてだけど基本動きながら攻撃すること。止まってたら良い的よ』

「了解」

私はスロットルとレバーを操作し、動きながらドラゴンに攻撃を行うが当たらない。

『——まっすぐに向かって来ない奴には偏差射撃を行いなさい。移動する方向に照準を置いて撃つの』

「(こ)う……かな？」

攻撃が普通に当たりドラゴンが再び落ちる。

『——ほんとに筋がイイねえ！ 全員下がりな！ 新人祝だ。ガレオン級以外の残りくれてやりな』

『——うわ、隊長酷い……』

『——まだまだ残ってるよ〜！』

……数えると残り9……新人に任せる量じゃない……けど、やってみよう。

「サリア」

『——何？』

「右手のソレ貸して」

私はサリアの対ドラゴン用アサルトライフルを貸して欲しいと言う。

『——ハア？』

『——こりやあいいー！ サリア、貸してやんな』

隊長も随分と乗り気だ。

『——分かったわ。はい』

「ありがとう」

左腕で受け取り小さいドラゴンが居る中に突っ込む。

「動きながら……」

スラストターを制御しドラゴンに近づかれないように動く。

「移動先を先読みし照準し……」

正面にいる2、3体の移動予測先を照準し

「攻撃する」

両腕のトリガーを引いた。

連続射撃により3体連続で落とし、次を狙う。

逃げるような立ち回りをして、ドラゴンの着いて来れる旋回角度で曲がり90度その場でターン。着いて来たドラゴンを照準し一気に落とす。これで4つ落とした。

後2つ……は右と左から挟撃。私は両腕を開くようにして機体側の照準ではなく大体の銃身の照準を行い撃った。どちらも一緒に落ちた。

『——凄い……』

「サリア、返す」

『——え、あ……分かったわ』

サリアが近づいてくる。左腕のアサルトライフルをサリアの機体の右腕に渡す。

『——凄いいじゃないか！ 新米！』

『いい加減、名前で呼んで貰えませんか？』

『——ああ、済まないね。レナ』

『大きいので、逃げちやいますよ？ 良いんですか？』

今、ピンク色のヴィヴィアンのやつと赤いヒルダのやつで足止めしてるけど……

『——わざとだよ。どうやって大きいのを落とすのか見ときな』

そう言った瞬間、前衛とサリアと隊長が前に出る。

『——総員、凍結バレット装填』

多分、何かの操作をしたのだろう、左腕の緑色のを展開し全員大きいのに突撃する。

一番最初にヴィヴィアンが左腕のを撃つと当たった所が大きな氷の結晶を作るように凍結し崩れる。次にサリアとヒルダが翼の付け根に撃ち込み、最期に隊長が腹にゼロ距離で撃ち込むと大きいのは落ちて海中に没すると瞬時に海が凍った。

『……どんだけ冷たいんだ』

そうして、私の初陣は終わった。スクーター級10体、それが初陣のスコアだった。新米でこのスコアは良いらしいが、戦い方も特殊な例らしかった。少なくとも新人じゃないのではと疑われるようなレベルらしい。

第04話 改造

メイルライダーとしてドラゴンを狩るようになってか一ヶ月が経ち、メイルライダーとしてどうにか新米と呼ぶのが消え始めた頃……私は4度目の報酬受け取りをしていた。

「撃破、スクーナー級20、ガレオン級への凍結バレット撃ち込み2。弾薬消費に燃料消費を差し引いて……今週分、180万キャッシュ」

出された札束を私は受け取る。

「ようやく目標金額」

今回の報酬で溜まったのは1000万キャッシュ。1つの区切りだな。

「何の目標にしていたんだい？」

隊長がそう聞いてくる……横に連れたヒルダの胸を愛撫しながら、だが……まあそれはどうでもいいことか。一先ず私には関係ない。

「ちよつとジャスミンモールで欲しいものがあつたので」

「それで1000万キャッシュか」

「では、急ぎでもあるので！」

私は隊長にそう言ってこの場から離れた。

・・・・・

私は着替えた後、すぐにジャスミンモールへ行きパラメイル関連のものを扱う区画へ来ていた。

高出力ジェネレータ、高レスポンスアクチュエータ、シールド、ブレード、ライフル
……様々な物が揃うここでは列車砲まで陳列することがあるらしい。

「どんな用だい？ レナ」

「ジャスミン、対ドラゴン用アサルトライフルはあるかな」

「アサルトライフルかい？ ああ、あるよ」

「本当か？」

流石はジャスミンモール。何でも揃っているな。

「まあ、若干のアップデート版だけだね」

そう言われて出されたのがアサルトライフル銃身下のアタッチメントがグレネードランチャーではなく長めのブレードに換えられたバヨネット付きアサルトライフルだった。

「これ、いくら？」

「1丁560万キャッシュだね」

「ね、値上がりしてる」

前に確認した時は360万キャッシュだったような気がするんだけどなあ……

「悪いがバヨネットアタツチメントのみは無いからね」

ううむ……しようがない、やるか。

「2丁、レナジャスレートで」

「勝負はいつも通りポーカでいいね」

「もち」

私とジャスミンは座り、私はトランプのデッキを取り出す。

「チェンジは1回」

「レートはアンタが勝ったら半額、私が勝ったら倍額でいいね」

「じゃ、始めましょうか」

デッキを良く切り、カードを5枚ずつ配る。

回ってきたのは完全にブタ……けど、仕組んだおかげもあってストレートフラッシュが見える。

「何枚チェンジですか？ 私は2枚です」

「1枚チェンジだ」

同時に手札からカードを裏向きで捨ててデッキから2枚引き、ジャスミンも1枚引

く。

来たカードでストレートフラッシュが確定。

「さて……と」

「コール、フォー・オブ・ア・カインド」

「コール、ストレートフラッシュ」

ジャスマンが4のフォーカード、私がクラブの7、8、9、10、Jのストレートフラッシュ……ジャスマンのやつ、ディーラーでもないのにイカサマを……

「私の負けだね、半額……510万キャッシュだ」

「はい、510万キャッシュ」

私はキャッシュを渡す。

「毎度あり。武装の変更についてはメイに言いな」

ジャスマンは立ち上がっていつもの定位置に戻る。私はトランプを回収して……

「……マジですか……」

捨て札の3枚の中にはジョーカーが1枚……私のところには来ていないからこれはジャスマンの捨て札ということだ。

「ファイブ・オブ・ア・カインド」

ファイブカード……ジョーカーを含むポーカーにおいてロイヤル・ストレート・フ

ラッシュ以上の唯一の役……

「イカサマもここに極まりだな」

私はジャスミンモールから出て整備デッキへ向かった。

……

「メイ、居るかー？」

メイが走ってこつちに来る。

「何？ パラメイルのカスタマイズ？」

「うん、そうなんだけど」

私は腰のポーチからハンカチを取り出してメイの頬に付いていた機械油を拭き取る。

「男が居ないからって身嗜みを疎かにしちやダメだよ」

「あ……ありがとう。で、どんな用？」

「ジャスミンのところから買い取ったバヨネットアサルトライフル2丁を私のに載せてくれない？ 元々の方はどこかに仕舞っておいて」

「んー……1丁は機首に積めるけどもう1丁はどこに……」

腰の部分は無理だし……ウイングに付けるにしたって速攻で使えるわけではない……となると……

「ハウザーに装備する感じで2丁装備できないか？」

ハウザーとはアルゼナルで運用されている3機種の内のものでグレイヴがオールラウンダーな機体に対しハウザーは砲撃戦に向いている重歩兵が扱う機体だ。第1中隊ではエルシャとクリスが使っている機体だ。いかにも重そうな感じだ。

ハウザーには機首部にアサルトライフルをマウントできないため、フライトモード時には後ろに回される腕と機体の下方で中心線外してマウントされているのだ。通常のアサルトライフルでは機動を取りながら撃つとボディーに当たる可能性があるためロングバレルにしてマウントすることが多いのだそうだ。

「んー……それをやってもいいけどフライトモードの時にボディーに当たる可能性があるよ」

「じゃあ、連射速度そのままに銃身伸ばせないか？ アタッチメント部分も一緒に伸ばしてくれると有難いんだが」

「ロングバレル……？ 少しお金とるけど良い？」

無改造なら良かったが改造するならしょうがない。

「いいよ、いくら？」

「400万キャッシュ」

「はい」

私はハンカチを取り出したポーチから400万キャッシュを取り出して渡す。

「確かに受け取ったよ。今から作業するけどすぐに出撃って可能性もあるからしばらくは1丁のままで我慢してね」

「分かった」

メイは作業に戻ろうとして一度足を止めた。

「レナ、グレイヴに色を塗る気はない？」

「色……？」

「うん、色。ゾーラの紫やサリアの水色、ヒルダの赤にヴィヴィアンのピンク、ロザリーの黄にエルシヤのオレンジ、クリスの緑……皆自分のパーソナルカラーを決めてるよ」

……それってさ……多分だけど……

「そのパーソナルカラーってライダースーツの色じゃないの？」

「あ、そう言えば」

「まあ、塗ってくれるならお願いするよ」

了解！　と言ってメイは作業に戻っていった。

・――・――・――・――・――・――・

メイに改造を頼んで2日。その間はドラゴン出撃はなく、暇な訓練の日々だった。

訓練は主にシミュレーターでの仮想訓練と実機での連携訓練の2つだ。シミュレーターでは実践のような対ドラゴン用訓練を行い、実機訓練では編隊飛行や急旋回急上昇急降

下などの訓練を行う。

とは言え、ドラゴンが来なかった訳ではないのだ。

ここアルゼナルには3つの中隊があり、基本的にシンギュラーを開く前に連絡がある。

シンギュラーを開く場合にはアルゼナルで決められたシフトで動くのだが、基本的に第1中隊がドラゴンを狩る。故に第1中隊は儲けが大きい危険のリスクも大きい……だからこそ『死の第1中隊』と呼ばれるわけだ。

ちなみに第1中隊の損耗率は半年で隊長が変わるレベルらしい……ゾーラ隊長は半年前に隊長に格上げしたんだそうだ……まあ、その時に隊長以外の古参の部隊員は殆ど居なくなつて私の1年前にメイライダーとなつたゾーラ以外の部隊員が第2、3中隊から引っこ抜かれて今の第1中隊になつたらしい……そう考えるとゾーラ隊長は随分と悪運が良いらしい。

で、久しぶりにメイに進捗を聞きに来ていた。

「メイ、どんな感じ?」

今、ちょうど私のを整備していたメイに話し掛ける。

「うん、ちょうど終わったよ」

「どんなかんじだ?」

「まあ、時には問題なく。後はレナの感覚かな……」

「それは実際にやってみなきゃどうしようもないな……」

機首部ではなく、下面に装備された私のアサルトライフル。ロングバレルになったお陰でボディに当たるとは無いはずだが……

「重量も少し増してるから……もしかしたら重いと感じるかもしれない」

「あー……その時はその時だな」

「アクチュエータももう一回弄ったけどすぐにバカになっちゃうかもしれない」

整備性に難有りってところか……まあ、本来なら両腕に装備することはないはずだしな。しょうがない……

「エンジンも弄って出力上げておいたよ。速度もう少し出ないかって愚痴ってたし」

「よく聞いてたね、そんなの」

「パラメイル関連で聞き逃すことは無いからね」

ぼろっと零したことだったんだが……聞こえたのか……結構な騒音の中で言ったよ
うな気がするんだけどな……

「ま、これで改造も終わり！ 色も塗っておいたしまった何かあれば言ってね！」

メイは再びパラメイルの整備に向かった。

光を反射しない灰色の塗装がされた私のグレイヴ……白から灰色だと一瞬でイメー

ジが違ふようだ……

第05話 レナ機改、出撃

改造終了の確認をした直後、部屋で本でも読もうと思つて部屋に向かう途中に突然サ
イレンが鳴り出した。

非常用の回転ランプが赤い輝きで警報を助長する。

《第一種遭遇警報発令！ パラメイル第一中隊発進準備

繰り返す、第一種遭遇警報発令——》

「慣らしをする暇もないとは」

それとも、今まで空気を読んでくれたのかな……？

私は部屋に向かう方向とは逆にある更衣室に向かった。

・――・――・――・――・――・――・――・――・

「総員騎乗！」

ゾーラ隊長の言葉を聞いた直後、私は灰色のグレイヴに乗り込む。

「さて……ぶつつけ本番だけど頑張りますか」

前列が発信し終わると前が空く。

『——レナ機、発進どうぞ』

「了解、レナ機発進する」

ランディングギア起こし、発進……って！

「は……やい……」

メイのやつ、エンジン出力どこまで弄ったんだ……！

『——早速改造したようだねえ、レナ？』

面白いものを見るような顔をした隊長の顔がインジケーター横のモニターに映る。

「楽しみといえ、これぐらいですから」

『——これでスコアが良ければ突撃兵に任命してやろうじゃないか』

「感謝します」

隊長の言葉にそう返す。

《——シンギュラー開きます！》

空間が歪んでそこからドラゴンが出てくるが……一際大きいエモノが普段のようなガレオン級などではなく、3対6翼を持つガレオン級より一回り小さいドラゴンだった。それが4体もいる。

《——スクーナー級46、キヤラベル級4》

『——多いのは大いに結構！ 総員、戦闘開始!!』

『「イエス・マム！」』

『——レナ、お前はヒルダとヴィヴィアンと一緒に突っ込みな』
「了解！」

私は先行したヒルダとヴィヴィアンを追いかける。

『——よろしくな！』

『——落ちるんじゃないよ』

「近接戦は初めてだしお手柔らかに！」

私は駆逐形態に変形すると銃を正面に撃ちながらスクーター級の群れへと突っ込む。
銃で撃ち落としながら切り裂く。撃って切り裂いて更に撃ち、斬りまくる！

「これは良いや!!」

スクーター級の群れを抜けた頃にはグレイヴの各箇所が真っ赤に染まっていた。

『——はしやぎ過ぎだ!』

「良いじゃないか! 楽しいんだからさ!」

ヒルダの言葉に喜の感情を乗せながら返す。

手近に居たスクーター級に右腕のバヨネットを突き刺し、乱射する。

「たあああああおいしい!!」

『——タイチヨー! レナが壊れたアアア!!』

壊れたとは失敬な! せめてドラゴン狩りを楽しんでいると言え。私は至って普通

だ、壊れてなど居ない。

「失敬だなヴィヴィアン！ 私の何処が壊れてるって!？」

私はヴィヴィアンが狙っていたドラゴンを撃ち落としながら聞いた。

『——あー！ 私の獲物をー!』

「いつまでも時間を書けてるヴィヴィアンが悪い!」

『——なら、いつただけい!』

ヒルダが私の狙っていたのを落とす。

「よし、死刑」

私はそう言ってヒルダの後ろから迫っていたドラゴンを撃ち落とす。

『——居るなら居るって言え！ こえーだろうが!』

「お前に怖いなんて感情があったのか！ そりゃ驚きだ!」

『——テンメエ……ぜってえに泣かす!』

「やれるもんならやってみろ!」

そんな軽口の応酬をしている間にスクーナー級の数が減ってきた。

『——総員！ 凍結バレット装填!』

「待つてましたあ!!」

私は隊長のその言葉が聞こえた瞬間に左のレバーを操作し左のアサルトライフルを

後ろのバインダーに装備することで開いた左腕の凍結バレットを装填する。

『——突撃い!』

私はスロットルをフルで飛ばし、キャラベル級に突っ込む。

キャラベル級は魔法陣を展開し鱗を飛ばして攻撃してくるがそれを全て避けてゼロ距離でブチ込む。

その一撃でキャラベル級は落ちて海面を凍らせる。私は周囲を確認しもう1匹居たキャラベル級にもう一度凍結バレットをブチ込んだ。

『——あー!! レナのやつ大物2体落としやがった!』

「五月蠅いロザリー! やるなら手伝えの一言ぐらい寄せせ!」

『——なら、もう1体やるぐらい言えよ!』

「じゃあ、後方注意(チェックシックス)」

『——え?』

スクーター級に後ろから取り付かれたロザリー。

『——くっ! このっ放せよ!!』

「助けてやろうか?」

『——これ以上、報酬を増やさせて貯まるかよお!!』

「なら沈んでしまえ」

『——ギャー！ ごめんなさいお願いします助けてください！』

私は一気に接近してバヨネットでロザリー機に取り付いていたスクーナー級を切り裂き振り払う。

「はい」

『——さ、さんきゅー……』

「いや、これぐらい普通だって」

私は後ろから近づいていたドラゴンを振り向きざまのバヨネットのブレードで切り裂く。

これでドラゴンは全滅。スコアはスクーナー級18、キャラベル級2……いい感じのスコアじゃないですかね。

『——レナ』

「はい」

隊長からの通信……何でしょうかねえ……

『——次からアンタは突撃兵だ。いいね？』

「了解です」

『——じゃ、帰投するよ！』

『「イエス・マム！」』

「そうして改造したことによって私は結構大きな戦績を上げた。」

.....

「撃破、スクーター級32、キャラベル級へのアンカー打ち込み2、ガレオン級へのアンカー打ち込み3。そこから燃料消費、弾薬消費、機体修理費をマイナスして……今週分、320万キャッシュ」

「あれ……なんか少ない……」

「改造前より弾薬消費が激しくなってますよ」

「……あー……そう言えば結構撃つようになったしなあ……下手なテツポも数撃ちや当たるとな……そんな感じで……」

「いやいや、アンタの場合は下手なテツポじゃなくて乱射魔（トリガーハッピー）なだけだろ」

「よし、んじゃあ私と弾薬費で勝負してみるか？ 弾薬消費多かったほうがジャスミン

モールで飲み物奢るんだ」

ロザリーがそう言ってきたため私はそう返した。

「良いじゃねえか！」

お互いに一度聞こえないように弾薬消費を聞く。

「じゃあ」

「せーのっ!」

「112万」「215万!」

前者が私で後者がロザリー……約2倍の違いがあつたのかい。

まあ、約束は約束だ。

「さて……何を奢つて貰おうかな……」

「お、お手柔らかに……」

「私が一番好きなのはクレイジーチエイサーコーラ（CCC）だ」

クレイジーチエイサーコーラ、通称CCCは通常のコーラよりも炭酸3倍の超刺激的な飲み物でお値段20万キヤッシュもするある意味ゲテモノ飲料だ。最近は週一感覚で飲んでいる飲み物だ。

「よ、よりによつてCCCかよ……」

「美味いじゃないか、あれ」

「お、わかつてるなあ……レナ」

どうやら隊長も好きなようだ。

「ありやジャスミンの保存の仕方も上手いと思わないか?」

「あの炭酸を抜かないような保存は凄いですね」

「そうだろう?」

そんな訳でその後隊長と一緒に風呂でキンキンに冷えたCCCを飲んだ。やはり任
務上がりの風呂は格別でキンキンに冷えたCCCも格別だった。